

# うれしいもの、懐かしいものとして、 いつまでも心に残る褒められた思い出

～ 漫画家・井上雄彦と歌人・島秋人の場合 ～

立科町教育相談員 岩上起美男

日本の漫画は、世界に冠たる芸術である、と高く評され、今、世界各国で読まれているそうです。

小説家の北杜夫（1927・5・1～2011・10・24）は、子どものころ、母親から「そんなことをしていると、30歳過ぎてても、漫画を読んでいるような人間になってしまう。」とよく言われたそうです。しかし、今年年齢を問わず、漫画を堪能できる時代です。或る作家は、「漫画家になれなかったので、小説家になった。」と述べていますが、事ほど左様に、優れた文学作品や映画のような感動と漫画独自の諧謔味をもたらし続ける漫画が続々と出版されています。

間違いなく、その一角を担っている漫画家で、「スラムダンク」「リアル」「バガボンド」などの作者・井上雄彦は、高校時代に、祖父から「髪の毛が生きてっごたいねえ。」（鹿児島県の方言「まるで髪の毛が生きているみたいだね。」と、自分の描いた絵を褒められたことが嬉しくて、漫画家としてやっていける自信を抱いたそうです。そして、祖父の言葉は、「やっていける、という電池みたいなもの」で、今も心の糧になっていると語っています。（NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」）

歌人・島秋人（本名・中村覚）は、元

死刑囚です。幼少期から、病弱と貧困のためにまわりの人から疎んじられ、性格がすさんでいた島秋人は、飢えに耐えかねて、新潟県で強盗殺人事件を引き起こしてしまい、昭和35年に死刑判決を受けました。その後、昭和42年11月2日、33歳で刑に服するまでの7年間、自らの罪を悔いる心や命の尊さ、生の喜びを短歌に詠みました。そして、昭和36年から、毎日新聞の「毎日歌壇」（選者・窪田空穂）に投稿し、アメリカの雑誌「タイム」が紹介記事を掲載したり、「毎日歌壇賞」を受賞したりと、大きな波紋を呼びました。

死刑判決後、島秋人は、中学生のときたった一度だけ、先生から「君は、絵は下手だが、構図が一番いい。」と褒められた記憶が忘れられず、その先生に獄中から手紙を書きました。この手紙がきっかけとなって、短歌と出会い、島秋人の作歌の才能が開花したのです。

刑死後に出版された歌集「遺愛集」（「東京美術」発行）で、島秋人は、「たった一言のほめことが私の心を救い、私の人生をかえた。私のようなおろか者でも七年間という長い月日に少しは人がみとめてくれる『うた』を詠むことができた。ありがたいことです。」と述懐し、褒められたことの嬉しさを、次のように詠んでいます。

ほめられしことのなつかし笑みあつて独り憶ひのさ夜は更けたり  
ほめられしひとつのこのうれしかりいのち愛しむ夜のおもひに  
ほめられし事くり返し憶ひつつ身に幸多き死囚と悟りぬ

島秋人は、少年時代からの人生を顧みて、いかに教育が大切であるかを痛切に感じ、「歌集発行のあかつきには、教育にたずさわっている人々に、ぜひ一読を得たい。」と洩らしていたそうです。老婆心ながら、島秋人の「遺愛集」は、学校教育の場でこれからもずっと伝承していきたい教師必読の一書と存じます。

このような、褒められたことによって、やる気がわいたり、自信や心の支えを得たり、困難や逆境を乗り越えたり、さらに、生き方や考え方が変わったたりした体験は、程度の差こそあれ、どなたにもあるのではないのでしょうか。

ところが、親も教師も、褒めることの意味や効果を重々承知して、褒めることと叱ることの調和を大切にしたいと考えていながら、実際は、子どもを褒めることは極端に少なく、ついつい叱ってしまうことが多いようです。

決して褒めることに不熱心ではないのに、どうしても叱ることが多くなってし